

『三才図会』珍宝一巻の出版

—「証類本草」からの引用—

河野敏宏

【目次】

- 1 はじめに（本稿の目的と結論）
- 2 珍宝一巻収録条目と「証類本草」当該条目との一致
- 3 「証類本草」からの複数回にわたる引用
- 4 おわりに（今後の課題）

1 はじめに（本稿の目的と結論）

『三才図会』（明の王圻^{おうき}及びその子、王思義編。萬曆三十七年「一六〇九」頃刊行。）は、各種分野の事物をひとつひとつ条目¹⁾として立て、それぞれについて図を掲載して解説を記した類書である。収録されている条目は多岐にわたっており、これらの条目には、多種多様な典籍から引用された注文が収録されているが、その出典注はほとんど付されていないため、個々の注文内容だけから、その出典を特定することは極めて困難である。ただし、本書

の序文には「図絵以勅之于先、論説以綴之于後。」と記されているから、本書が事物の解説にあたって「図」を掲げることを重視していることは明らかであり、従って、本書に引用された典籍の中心をなすのは、図を豊富に掲載している典籍である可能性が高い。

図を豊富に掲載している典籍には様々なものがあるが、本草書もその一つである。本草書は各種動植物の薬効を解説した薬物書であり、それらの中には、薬物原料となる動植物を同定する一助として図を豊富に掲載しているものがある。図を掲げること重視する『三才図会』が、このような、図を多数掲載する何らかの本草書を重視した可能性は高い。

この推論に基づき、かつて、『三才図会』の草木一巻と十一巻「草類・木類・蔬類・菓類・穀類」（全四八三条）を対象としてその出典を調査し、以下の結論を得た。²⁾

1. 『三才図会』草木一巻と十一巻の大部分の条目の配列順序及びその注文は、「証類本草」収録条目のうち、図及び『図経本草』注文を掲載している条目のそれと極めてよく一致する。
2. 『三才図会』のこれらの条目は、「証類本草」（あるいはその内容をそのまま取り込んだ書）からまとめて引用されている。
3. 『三才図会』に引用された「証類本草」は「政和本草」以降のものである。

4. 『三才図会』のような類書は、一般的に多様な書を引用するが、『三才図会』草木一卷〜十一巻においては、「証類本草」からの引用が大部分を占めており、「証類本草」に大きく依拠していることがわかる。

5. ただし、草木八巻〜十一巻においては、「証類本草」に加えて、『救荒本草』や『茹草編』からも多数の条目をまとめて引用している。

6. 両書はいずれも図を多数掲載している書であるから、この引用実態には、「図を重視する」という『三才図会』の編纂方針がよく反映されている。

7. 『救荒本草』や『茹草編』も、「証類本草」と同様、本草書であるから、『三才図会』編者は、植物名を大量に収録するにあたっては、本草書を重視したことがわかる。

ところで、『三才図会』には、珍宝二巻が収録されており、珍宝一卷の前半約三分の二には、その注文内容から明らかに薬用と思われる各種鉱物名が収録されている。

本稿は、上記の結論をふまえた上で、『三才図会』珍宝一卷における各種鉱物条目の出典を調査し、『三才図会』編者がこの巻においてどのような書を主要参考文献としたのかを明らかにしようとするものである。

本稿の結論を予め示せば次のようである。

1. 『三才図会』珍宝一卷のうち、冒頭の「南北珠」一条及び巻末の「錢図上」を除く各条目は、「証類本草」玉石

部上・中・下品の収録条目のうち、図及び『図経本草』

注文を掲載している条目と極めてよく一致しており、「証類本草」当該部分から引用されたものと考えられる。

2. 『三才図会』これらの条目は、一般的な貴重度に從い、「証類本草」玉石部上・中・下品から四度に分けて引用されたと考えられる。

以下、詳述する。

《使用テキスト》

『三才図会』……『三才圖會』上中下（上海古籍出版社、一九八八年六月）

「証類本草」……『重修政和經史證類備用本草（晦明軒本政和本草）』（南天書局有限公司、中華民國六五〔一九七六〕年八月）

『經史證類大觀本草（大觀本草）』（國立中國醫藥研究所、中華民國六〇〔一九七一〕年十二月）

2 珍宝一卷収録条目と「証類本草」当該条目の一致

『三才図会』珍宝一卷の前半約三分の二には、各種薬用鉱物名が全五九条収録されているが、同書の他の条目同様、その出典注記が記されていないため、これらの条目がどのような典籍から引用されたのかをただちに知ることはできない³⁾。しかしながら、同

証類 連番	証類 標目	標目 出自	証類 巻数	図の 有無	図経 注の 有無	三才 連番	三才 標目	三才 巻数	図経 注の 一致
976	丹砂	神農本経	巻3	○	○	552	丹砂	珍宝一卷	○
977	雲母	神農本経	巻3	○	○	563	雲母	珍宝一卷	○
978	玉屑	名医別録	巻3	○	○	557	玉	珍宝一卷	○
978	玉屑	名医別録	巻3	○	○	558	玉屑	珍宝一卷	○

〔表1〕「証類本草」から『三才図会』への引用

図経曰水銀生符陵平土今出秦州商州道州邵武軍而秦州乃来自西羌界経云出於丹砂者乃是山石中採麤次朱砂作鑪置砂於中下承以水上覆以盆器外加火煨養則煙飛於上水銀溜於下其色小白濁。
 (「証類本草」巻四 玉石部中品「水銀」)

〔表1〕をみると、『三才図会』の標目及び注文は、「証類本

書草木一卷く十一巻の出現調査によって、「証類本草」がその主要出典であることが明らかになってきたことから、この珍宝一卷の条目もまた、「証類本草」から引用された可能性が高いと推定される。この推定に基づき、珍宝一卷の各条目の注目を「証類本草」の当該部分と比較してみると、どの注文も極めてよく一致していることがわかる。(「水銀」の条を例示する。)

水銀生符陵平土今出秦州商州道州邵武軍而秦州乃来自西羌界経云出於丹砂者乃是山石中採麤次朱砂作鑪置砂於中下承以水上覆以盆器外加火煨養則煙飛於上水銀溜於下其色小白而濁。
 (『三才図会』珍宝一卷「水銀」)

『三才図会』珍宝一卷の各条目が、「証類本草」玉石部上・中・下品の各条目とどのような関係にあるかを示すために、『三才図会』の各条目を、「証類本草」各条目の配列に従って対比し、「表1」『証類本草』から『三才図会』への引用、として掲げる(紙幅の都合上、その前半部分のみを掲げる)。

〔表1〕の「証類連番」「三才連番」はそれぞれの書における標目(薬品名)の序数である(他の論文との整合上、いずれも1からは始まっていない)。「図の有無」「図経注の文の有無」の○印は、それぞれ、「証類本草」において、薬図が掲載されているもの、「図経本草」の注目が掲載されているもの、を示す。「図経注の文の有無」に「無」■の條(巻▲)とあるのは、その注目が当該条目には無く、巻▲の「■」の条目に併載されていることを示す。「図経注文との一致」の○印は、その「証類本草」所載の『図経本草』注文と『三才図会』当該薬物の注文とが一致することを示す。

1002	1001	1000	999	998	997	996	995	994	993	992	991	990	990	989	988	987	986	985	984	983	982	981	980	979	連番	証類	
白青	黒石脂	白石脂	黄石脂	赤石脂	青石脂	五色石脂	紫石英	白石英	太一餘糧	禹餘糧	曾青	空青	空青	石膽	滑石	生消	馬牙消	玄明粉	朴消	芒消	消石	礬石	石鍾乳	玉泉		証類標目	
神農本經	新分條	新分條	新分條	新分條	新分條	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	今附	新補	新補	神農本經	名医別録	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	神農本經	標目出自	
卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	証類卷数	
無	無	○	無	○	無	無	○	○	無	○	○	○	○	○	○	無	無	無	○	○	○	○	○	○	○	有	図の
無	無	○	無	○	無	無	○	○	無	○	無	○	○	○	○	無	無	無	○	無	無	○	○	無	無	図経注文の有無	
		574		573			572	571		570		554	553	569	568					567			565	564		連番	三才
		白石脂		赤石脂			紫石英	白石英		禹餘糧		曾青	空青	石膽	滑石					消石			礬石	石鍾乳			三才標目
		珍宝一卷		珍宝一卷			珍宝一卷	珍宝一卷		珍宝一卷		珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷					珍宝一卷			珍宝一卷	珍宝一卷			三才卷数
		○		○			○	○		○		○	○	○	○					○			○	○			図経注文との一致

1027	1026	1025	1024	1023	1022	1021	1020	1019	1018	1017	1016	1015	1014	1013	1012	1011	1010	1009	1008	1007	1006	1005	1004	1003	証類 連番
水中石子	諸金	石牌	石黄	黄銀	枷上鐵釘	釘棺下斧聲	銅盆	布鍼	鐵鏞	神丹	勞鐵	古鏡	金漿	浪斯磬	金線磬	車渠	扁青	柳絮磬	緑磬	婆娑石	菩薩石	無名異	石中黄子	緑青	証類 標目
陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	海菓餘	海菓餘	海菓餘	神農本經	新補	新補	今附	新補	今附	唐本先附	名医別録	標目出自
卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	証類 巻数
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	○	無	○	○	○	有 無の 図
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	○	○	○	図 経注 文の 有無
																						575	576	559	三才 連番
																						無名異	石中黄子	石緑	三才 標目
																						珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	三才 巻数
																						○	○	○	図 経注 文 と の 一 致

1052	1051	1050	1049	1048	1047	1046	1045	1044	1043	1042	1041	1040	1039	1038	1037	1036	1035	1034	1033	1032	1031	1030	1029	1028	連番	証類
食鹽	雌黄	石硫黄	雄黄	六月河中諸熱砂	阿婆趙榮二葉	特蓬殺	煙葉	印紙	温石	玉膏	金石	大石鎮宅	霹靂鍼	石髓	玻瓈	石欄干	玄黄石	白師子	流黄香	暈石	研朱石槌	石葉	燒石	石漆	証類 標目	
名医別録	神農本經	神農本經	神農本經	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	陳蔵器餘	標目 出自	
卷4	卷4	卷4	卷4	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	証類 巻数	
○	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	有 無	図 の
○	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	図 経注 文の 有無
	562	577	561																						三才 連番	
	雌黄	石硫黄	雄黄																							三才 標目
	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷																							三才 巻数
	○	○	○																							図 経注 文 と の 一 致

1080	1079	1078	1077	1076	1076	1076	1075	1074	証類 連番	証類 標目	標目 出自	証類 巻数	図の 有無	図経 注文の 有無	三才 連番	三才 標目	三才 巻数	図経 注文 との一 致
石蠟	珊瑚	理石	石腦	鐵	鐵	鐵	鋼鐵	鐵落		今附	唐本先附	卷4	○	○	583	石蠟	珍宝一卷	○
										神農本經	神農本經	卷4	無	無「鐵」の條(卷4)	544	珊瑚	珍宝一卷	○
										名醫別録	名醫別録	卷4	無	無「鐵」の條(卷4)				
										神農本經	神農本經	卷4	○	無「石鍾乳」の條(卷3)				
										神農本經	神農本經	卷4	○	無「長石」の條(卷4)				
										柔鐵	鋼鐵	卷4	○		547	柔鐵 [鑄鐵]	珍宝一卷	○
										生鐵	生鐵	卷4	○		545	生鐵	珍宝一卷	○

(以下略)

「草」の各条目のうち、「図の有無」「図経注文の有無」がともに○印であるもの、つまり両者を掲載しているもの、の標目及び注文と極めてよく一致していることがわかる⁽⁴⁾。

この事実を、『三才図会』草木一卷〜十一巻においては「証類本草」が大量に引用されている⁽⁵⁾という事実と考え合わせれば、『三才図会』珍宝一卷においてもまた、「証類本草」玉石部上・中・下品のうちの、図及び『図経本草』注文を掲載している標目及び注文を、「証類本草」から抜き出して引用したと考えられる。

3 「証類本草」からの複数回にわたる引用

ただ、『三才図会』珍宝一卷における「証類本草」の引用にお

いては、同書草木一卷〜十一巻におけるそれとは異なる点がある。それは、「証類本草」玉石部から各条目を引用する際、複数回にわたって引用したと考えられることである。「表2」「証類本草」からの複数回にわたる引用、は、「表1」における「証類本草」の「図の有無」「図経注文の有無」がともに○印であるもの(『三才図会』において独立した条目として引用されているもの)のみを抜き出し、『三才図会』の連番に従って配列したものである(全例を示す)。

562	雌黄	珍宝一巻	1051	雌黄	神農本経	巻4	○	○	○
561	雄黄	珍宝一巻	1049	雄黄	神農本経	巻4	○	○	○
560	長石	珍宝一巻	1081	長石	神農本経	巻4	○	○	○
559	石緑	珍宝一巻	1003	緑青	名医別録	巻3	○	○	○
558	玉屑	珍宝一巻	978	玉屑	名医別録	巻3	○	○	○
557	玉	珍宝一巻	978	玉屑	名医別録	巻3	○	○	○
556	自然銅	珍宝一巻	1166	自然銅	今附	巻5	○	○	○
555	水銀	珍宝一巻	1053	水銀	神農本経	巻4	○	○	○
554	曾青	珍宝一巻	990	空青	神農本経	巻3	○	○	○
553	空青	珍宝一巻	990	空青	神農本経	巻3	○	○	○
552	丹砂	珍宝一巻	976	丹砂	神農本経	巻3	○	○	○
551	青琅玕	珍宝一巻	1165	青琅玕	神農本経	巻5	○	○	○
550	錫	珍宝一巻	1143	鉛	新補	巻5	○	○	○
549	鉛	珍宝一巻	1143	鉛	新補	巻5	○	○	○
548	白羊石	珍宝一巻	1094	白羊石	図経餘	巻4	○	○	○
547	柔鐵〔鑄鐵〕	珍宝一巻	1076	鐵	神農本経	巻4	○	○	○
546	鋼鐵	珍宝一巻	1076	鐵	神農本経	巻4	○	○	○
545	生鐵	珍宝一巻	1076	鐵	神農本経	巻4	○	○	○
544	珊瑚	珍宝一巻	1079	珊瑚	唐本先附	巻4	○	○	○
543	生銀	珍宝一巻	1055	金屑	名医別録	巻4	○	○	○
542	銀屑	珍宝一巻	1055	金屑	名医別録	巻4	○	○	○
541	生金	珍宝一巻	1055	金屑	名医別録	巻4	○	○	○
540	金屑	珍宝一巻	1055	金屑	名医別録	巻4	○	○	○
三才 連番	三才標目	三才巻数	証類 連番	証類標目	標目出自	証類 巻数	図の有無	図経注文 の有無	図経注文 との一致

〔表2〕「証類本草」からの複数回にわたる引用

587	586	585	584	583	582	581	580	579	578	577	576	575	574	573	572	571	570	569	568	567	566	565	564	563	連番	三才
石蛇	玄精〔太陰玄精〕	桃花石	蜜陀僧	石懈	凝水石	陽起石	玄石	磁石	石膏	石硫黄	石中黄子	無名異	白石脂	赤石脂	紫石英	白石英	禹餘糧	石膽	滑石	消石	黑羊石	礬石	石鍾乳	雲母	三才標目	
珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	珍宝一卷	三才卷数	
1092	1090	1085	1067	1080	1063	1064	1060	1060	1054	1050	1004	1005	1000	998	995	994	992	989	988	984	1093	981	980	977	連番	証類
石蛇	太陰玄精	桃花石	蜜陀僧	石懈	凝水石	陽起石	磁石	磁石	石膏	石硫黄	石中黄子	無名異	白石脂	赤石脂	紫石英	白石英	禹餘糧	石膽	滑石	朴消	黑羊石	礬石	石鍾乳	雲母	証類標目	
図経餘	今附	唐本先附	唐本先附	今附	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	唐本先附	今附	新分條	新分條	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	神農本経	標目出自
卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷4	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷3	卷4	卷3	卷3	卷3	卷数	証類
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	図の有無
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	図経注文の有無
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	図経注文との一致

〔表2〕を見ると、「証類本草」の標目の配列が、①「1055金屑」↓「1165青琅玕」、②「976丹砂」↓「1166自然銅」、③「978玉屑」↓「1051雌黄」、④「977雲母」↓「1189不灰木」、のように、四度にわたって「小さい序数↓大きい序数」を繰り返していることがわかる。⁶⁾そして、これらの引用においては、「証類本草」巻三〜五からの引用を繰り返している。つまり、まず一回目に「証類本草」巻四〜五から「1055金屑」↓「1165青琅玕」を抜き出して引用し、二回目に

再び「証類本草」巻三にもどって、巻三〜五から「976丹砂」↓「1166自然銅」を抜き出して引用する、というように、巻三〜五を四度にわたって最初から最後まで見渡し、その都度、「証類本草」各種条目をその配列順序に従って適宜引用している、ということである。ただし、①〜③までの引用の繰り返しは小刻みであるが、④の繰り返しにおける引用条目数は三六条目であり、一致する全五九条目の六割以上を占めている。

						598	597	596	595	594	593	592	591	590	589	588	三才 連番
						不灰木	花乳石	麤黄石	薑石	銀星石	金星石	金牙	石鷲	礪石〔礪砂〕	砒霜	礬石	三才 標目
						珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	珍宝一巻	三才 巻数
1193	1182	1150	1137	1052	1189	1184	1181	1181	1170	1170	1167	1151	1141	1139	1138		証類 連番
蛇黄	井泉石	代赭	石灰	食鹽	不灰木	花乳石	薑石	薑石	金星石	金星石	金牙	石鷲	礪砂	砒霜	礬石		証類 標目
唐本先附	新定	神農本經	神農本經	名医別録	今附	新定	唐本先附	唐本先附	新定	新定	名医別録	唐本先附	唐本先附	今附	神農本經		標目 出自
巻5	巻5	巻5	巻5	巻4	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5	巻5		証類 巻数
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		図の 有無
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		図経 注 文 の 有 無
					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		図経 注 文 と の 一 致

このように四度にわけて引用した理由としては、一般的な貴重度に従って段階的に取り出して配列したのではないか、ということが考えられる。

すなわち、「証類本草」から『三才図会』への引用の第一回目においては、「金屑」「生金」「銀屑」「珊瑚」、鉄、鉛、錫、等の貴金属・有用金属・宝石的なものを引用し、第二回目には、「丹砂」「空青」「水銀」等の、おそらくそれに次ぐ有用金属を引用し、第三回目には、「玉」「石緑」「雄黄」等の、さらにその次に序する有用鉱物を引用し、そして、第四回目（最終回）には、残存した鉱物のほぼすべてを「証類本草」の配列に従って引用したのではないか、ということである。

『三才図会』の基となった「証類本草」は本草書であるから、同書における鉱物の分類「玉石部上品・中品・下品」は、あくまでも「薬効」の基準によっている。しかしながら、『三才図会』は類書であるから、そのような薬効による分類よりも、一般的な貴重度によつて分類しようとするほうが自然であるし、その分類の方が「森羅万象を百科的に知る」という編纂目的にもかなっていると考えられる。

また、「証類本草」では、これらの鉱物を収録している巻名は、一般的鉱物を示す「玉石」であるが、『三才図会』ではその巻名は、貴重性を意味する「珍宝」となっている。この事実も上記の考察と矛盾しない。

4 おわりに(今後の課題)

以上の調査により、『三才図会』珍宝一卷においては、同書草木一卷く十一巻と同様、その条目を「証類本草」から引用しており、「証類本草」を極めて重視していることが判明した。また、その引用は、おそらく一般的な貴重度に従って段階的になされたものであると推定される。

ただ、現時点では、「証類本草」の「1052食鹽」「137石灰」「150代赭」「182井泉石」「193蛇黄」の五条が、図と図経注文を伴っているにもかかわらず、『三才図会』に引用されなかった理由が明らかではない。この点については今後の課題としたい。

注

(1) 『三才図会』においては、各巻ともに、個々の事物ごとに、その名称・図・注文を1セットにして掲載している。本稿では、この1セットを「条目(あるいは条)」と称する。ひとつの条目の分量は、巻によつて多寡があるが、例えば草木部においては、それぞれ一丁が割り振られている。なお、名称・図・注文を1セットにして掲載することは、本草書においても同様であるので、同じく「条目」という語を使用する。

(2) ①『三才図会』草木部収録項目の出典について(田島毓堂編『日本語学最前線』、二〇一〇年五月、和泉書院) ②『三才図会』草木八巻く十一巻の出典―「証類本草」からの引用―(愛知学院大学教養

部紀要第五九卷第三・四号合併号、二〇一二年三月) ③ 『三才図会』草木八卷ノ十一卷の出典―『救荒本草』『茹草編』からの引用―(愛知学院大学教養部紀要第五九卷第三・四号合併号、二〇一二年三月)

(3) ちなみに、珍宝一巻の残り三分の一及び珍宝二巻には各種貨幣を解説した「錢図上・下」が収録されており、この部分の条目は本草書とは無関係であることが明白であるため、今回の調査対象からは除く。

また、珍宝一巻冒頭には「南北珠」という一条があるが、これも本草書とは無関係であると思われるため、調査対象から除く。これらを除くと、今回調査対象とする条目は全五九条となる。

(4) 『証類本草』の「図の有無」「図経注文の有無」がともに○印であるにも関わらず、『三才図会』に収録されていない条目は、わずかに「1052 食鹽」「137 石灰」「150 代赭」「182 井泉石」「193 蛇黄」の五条のみである(「137 石灰」「150 代赭」「182 井泉石」「193 蛇黄」は「表1」省略部分にあたっているため、本稿「表1」には収録されていない)。「1052 食鹽」以外の四条には、「証類本草」玉石部下品に収録されているという共通点はあるものの、これらの五条が『三才図会』に引用されなかった理由は、現時点では不明である。

(5) 『図経本草』そのものからの引用ではないと考えられることについては注(2) 論文参照。

(6) ④の引用は、「1093 黒羊石」でいったん終わり、「984 朴消」から五回目の引用⑤が始まっている、ともみえるが、この箇所における、巻三以外からの引用はこの一例のみであり、その前後には巻三からの引用が多数続いていることから、本稿では、この「1093 黒羊石」は何らかの原因による「混入」とみなし、段階的引用は四度であったとする。

【付記】本研究は、公益財団法人東洋医学研究財団の「平成二四年度(第三五回) 東洋医学に関する研究・調査助成」によるものである。記して感謝申し上げます。